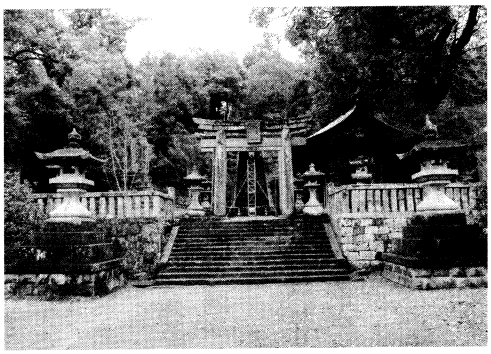
日田の八幡神社の初見は、天武朝に靭負郷岩松峰（日田市天瀬町金場の北）に宇佐の鷹居社にいます神、つまり八幡神を名乗る神が現れ、社を建てて祀ったと伝える。この岩松峰の伝承地には、後述する鞍形尾神社がある。その後、平安時代の延喜年間に日田郡司大蔵永弘によって、元大原神社に遷座した。その後、江戸時代に入って元和十年（一六二四）日田永山城主石川主殿守忠総により、現在の位置に遷座した。

現境内にある建物のうち、最古の建物である楼門は貞享四年（一六八七）の築造である。また拝殿・幣殿・本殿は寛政六年（一七九四）の築造といわれる。いずれも市指定有形文化財に指定されている。

大原八幡宮では仲秋祭（放生会）（九月二一日～二五日）、米占祭（三月一五日）など多くの祭礼があるが、とりわけ仲秋祭（放生会）は、永く市民に親しまれた祭りである。本稿冒頭で見たように淡窓も幼少のころから、この神社に参りまた遊んだ。

大原神社に対する尊崇は、廣瀬家・淡窓とも格別に深いものであった。『懐旧楼筆記』にも繰り返し参詣等の記事が見える。


大原神社

放学と遊山

大原神宮境内とその周辺は、豊かな自然にいだかれたところであるから、まずは廣瀬家・咸宜園の格好の放学・遊山の場となった。

・文政四年（一八二一）

九月晦日。伯父、伯母、先考ニ陪シテ山ニ遊ヘリ。門生従フモノ廿九人。凡男女合セテ四十人ニアマレリ。大原ヨリ本宮ニ至リ、又、金毘羅ノ社ニ返リテ行厨ヲ開ケリ。予家ヲ出ズル時、詩アリ。曰ハク。

昨雨誤遊子。今朝欣快晴。
夢先群雀破。心逐濁鴻軽。
淡日霧中影。新灘風外声。
同行人未到。踞石且詩成。

予、伯父母ニ陪シテ出遊スルコト、此時ニ終レリ。

・天保三年（一八三二）

三月十七日。門生ヨリ大原山ニ於テ、余及謙吉ヲ饗ス。廻廊ニ宴ヲ開ケテ伸平、久市ヲ伴ウテ同シク往ケリ。諸生会スル者、七十人余ナリ。

・天保七年（一八三六）

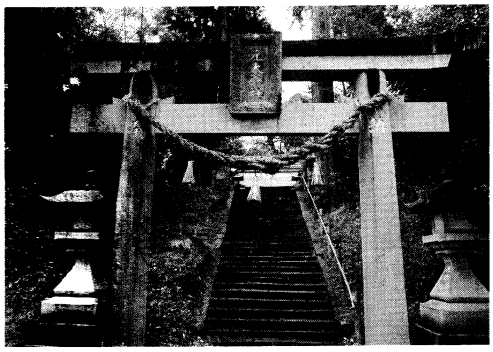
正月二十四日。妻、謙吉ト共ニ魚町ヨリノ請ニ因ツテ、往イテ大原山ニ遊フ。予、謙吉ト先往イテ、金毘羅ノ祠ニ謁シ、帰リ来ツテ大原廻廊ニ宴ヲ開ケリ。同座スル者数十人ナリ。此時、吉井ノ従母、密乗、禰六夫婦、皆先妣ノ祭リニヨツテ魚町ニ留マレリ。コレヲ以テ客トス。併セテ中村海蔵ノ妻ヲ招ケリ。

など、淡窓、廣瀬家の人々、そして大勢の塾生が、大原神社から、その背後にある金毘羅社、さらに元大原神社に詣で、この間に「行厨」を開いたのである。

金比羅神社と元大原神社（図1・23、26）

淡窓師弟が大原神社から足を延ばした金毘羅社は、大原神社本殿から尾根伝いに参道をあるいたところにある。今も大原神社に参詣した人の多くが足を運ぶところであ

大原金比羅神社


元大原神社